

令和 7 年 度 事 業 報 告



公益財団法人神津牧場

令和 7 年 度 事 業 報 告

1. 庶務事項

(1) 役員に関する事項（令和 8 年 3 月 31 日現在）

理 事 11 名、 監 事 2 名
評議員 9 名

(2) 役員の異動

常勤理事 須山哲男 就任（令和 7 年 6 月 24 日）
常務理事 山崎正史 就任（令和 7 年 6 月 24 日）
監事 澤井廣喜 死亡（令和 7 年 9 月 3 日）
評議員 荒木一平太 退任（令和 7 年 11 月 13 日）

(3) 職員に関する事項（令和 8 年 3 月 31 日現在）

場長以下 職員 15 名 臨時職員 3 名
参与 1 名

(3) 役員会等に関する事項

- イ. 令和 7 年 6 月 3 日(火) 14:00-14:30 **執行役員会** シルクセンター国際貿易観光会館会議室（横浜市中区山下町 1 番地）6 月 7 日開催予定の理事会および 6 月 24 日開催予定の評議員会の議題について
- ロ. 令和 7 年 6 月 3 日（火）14:30-15:30 **監事会監査** シルクセンター国際貿易観光会館会議室 令和 6 年度事業報告及び収支に関する決算報告の監査
- ハ. 令和 7 年 6 月 6 日（金）14:00-15:50 **令和 7 年度 第 1 回理事会** シルクセンター国際貿易観光会館会議室 令和 6 年度事業報告及び収支に関する決算報告並びに役員の改選ほか
- ニ. 令和 7 年 6 月 24 日（火）**令和 7 年度 第 1 回評議員会** 令和 6 年度事業報告及び収支に関する決算報告、並びに役員の改選ほか
- ホ. 令和 7 年 11 月 6 日（木） 14:00-16:00 本部 **執行役員会**
11 月 11 日開催予定の理事会の議題について
- ヘ. 令和 7 年 11 月 11 日（火）14:00-15:30 **令和 7 年度第 2 回理事会**
シルクセンター国際貿易観光会館会議室 令和 7 年度中間事業報告ほかについて
- ト. 令和 8 年 2 月 26 日（木） 14:00-16:00 本部 **執行役員会**
3 月 3 日開催予定の理事会および 3 月 18 日開催予定の評議員会の議題について
- チ. 令和 8 年 3 月 3 日（火） **令和 7 年度第 3 回理事会** シルクセンター国際貿易観光会館 令和 8 年度事業計画及び収支予算書ほか
- リ. 令和 8 年 3 月 18 日（水） **令和 7 年度第 2 回評議員会** シルクセンター国際貿易観光会館 令和 8 年度事業計画及び収支予算書ほか

2. 事業に関する事項

＜一般経過報告＞

神津牧場の特徴は広大な森林と草地を持っていることである。この資源を土地利用型の畜産に活用し、更に重層的な多面的機能として顕在化させることにより、外部経済効果を併せて持続的に活用しようとするのが牧場の目的である。土地利用型畜産としてはジャージー種牛の放牧利用を基本として、高付加価値の乳肉製品を生産・加工し、消費者に届けることである。また、ジャージー種牛の放牧で作り出される草原景観は多くの人にやすらぎといやしの空間を提供できる。更に、近年では食の教育の場や自然観察など環境教育の場としての深化を見せている。

生産の概況

本年は525個（昨年645個）のロールベール（約400kg/個）を生産し、ジャージー種牛109頭（124頭）を飼養し、45頭（56頭）の経産牛から、303トン（320トン）の生乳と57頭（58頭）の仔牛を生産した。搾乳牛放牧は4月から11月まで行った。飼料の高騰に対応して、コスト低減のために、2年続けて飼養頭数を少なくしている。

生産した生乳から牛乳、バター、ソフトミックス、ヨーグルト、チーズを製造している。年による品目間の変動はあるものの、概ね例年並みの製造となっている。チーズ熟成庫の再開に時間が掛かっており、熟成チーズの生産量が回復していない。アイスクリームは委託製造先が製造をやめたため、別の製造先を探したが、ロット数などの点で、適当な委託先が見つからない。

経営環境

2025年度は新型コロナ蔓延前の水準まで消費者行動が回復する一方、ウクライナ－ロシア、アメリカ－イランの戦争に端を発した物流の混乱、飼料価格の高止まり、円安によるエネルギー価格、資材や原材料価格の高騰が続いている。さらに、働き方改革や賃上げ要請、人手不足による人件費の高騰など生産コストの上昇が続いている。ITやAIなどの活用による合理化が求められているが、中小規模の経営では合理化の効果よりも投資コストの上昇が大きい。こうした生産コストの上昇に対応するため、2022年5月に7%程度、2025年2月に10%の値上げを行ったが、その後もコスト上昇及び経営状況の厳しさが引き続いており、さらなる値上げが必要である。

研修および研究連携ならびに体験等ふれあいおよび緑資源の活用

本年は13名の研修生を受け入れた。近年の傾向が引き続き、12名の研修生が女性であった。麻布大学野生動物研究室および農研機構鳥獣害研究者との連携研究を引き続き行った。この連携の積み上げの結果として、日本中央競馬会の畜産振興事業を開始し、来年度の継続が決定した。

本年も5回の牧場主催の親子牧場体験と小学校などの体験を受け入れた。酪農・畜産の理解醸成をはかるとともに自然理解を深める「親子牧場体験は、牧場の家畜や自然とのふれあい、バター作りや燻製づくりなどの畜産物の手作りなど盛りだくさんのプログラムで、参加者に好評であった。また、日帰りではあるが幼稚園や小学校の体験学習や移動教室も、都

会では経験できない大型動物とふれあうことができ、貴重な経験となっている。緑資源の活用として、NPO 法人の自然観察イベントを受け入れた。

地域連携

地域との連携は活動の成果を具体的なものとして提示する意味でも重要である。本年も、牧場主催の「花祭り」、「紅葉まつり」のイベントの他、世界遺産「荒船風穴」との連携企画、「下仁田ねぎまつり」、下仁田町「商工祭」などに積極的に参加した。

運営上の課題及び法人の運営体制の充実を図るための取組

牧場では50年前に新設した多くの施設が老朽化しており、その更新が課題となってきた。このため、2017年に製酪工場の新設を行ったが、ロッジの宿泊施設、搾乳舎（搾乳システムを含む）、牛舎、作業機、トラクターなど事業の根幹となる施設・機械の更新が喫緊の課題となっている。また、現在、地表水を取水しているが、近年の温暖化の影響から冬季に簡易水道の取水が困難になる現象が起きている。地表水の取水は衛生上の観点からも好ましいものではなく、安定的な水源としては地下水からの取水が望ましいが莫大な費用が必要となる。この他、山林への過去の投棄物の処理などの課題が残っている。

一方、役員の多くは、従来より外部から非常勤にて対応し、運営に必要な意見・助言等を行っている。そうした役割をさらに活性化させるため、役員の交代を行った。

<公益事業Ⅰ：ジャージー種牛の放牧酪農経営における6次産業化モデルの構築に関わる調査・実証・研修事業>

1) ジャージー種牛の飼養

(1) 草地管理及び飼料生産

本年度も5月下旬から1番草の収穫を開始した。春先の天候不順のため、1番草は132（228）ロールとなった（以下（ ）内は前年度）となった。2番草は241（238）ロールと前年とほぼ同じであったが、3番草は152（179）ロールと若干減少した。このため、年間では525（645）ロールと減少した。峠3、峠4は採草しなかった。大畑と峠1は1番草のみ、切通、荻の平下は2番草までの収穫となり、後は放牧利用とした。1番草を採草しなかった、また1番草のみの採草とした理由は、草の生長が好ましくなかった、また収量が得られなかったためである。これには、冬季間の降雨量が少なかったこと、及び、シカによる食害によると考えられる。特に、2番草、3番草を収穫しなかったのは主としてシカによる食害による。シカの食害回避のため、環境省のシカ対策事業を牧場周辺で行うことを要請し、群馬県により平成17年から適正密度に抑える捕獲事業を行っている。これまでの報告によれば毎年9月から12月までで100頭弱の捕獲が行われており、本年は100頭以上に及んだ。この他下仁田町の有害鳥獣捕獲事業も行われている。しかし効果が限定的であり、牧草被害の軽減には至っていない。

こうしたことを受けて、かねてより牧草のシカ被害対策研究を行っている麻布大学野生動物研究室塚田教授と相談して応募・採択された「2025年度日本中央競馬会畜産振興事業」に対策研究を応募した結果、「電気柵を用いた獣害に強い放牧畜産体系の構築・実証事業」（2025－2027年度）を実施し、本年の結果に対するヒアリングを経て、来年度の継続が決定した。

（２）放牧飼養技術の確立及び乳牛改良・種畜供給

本年４月１３日から昼間放牧を開始し、５月８日から夜間放牧を開始した。一方、秋期は前年同様１１月に入ると放牧地でのサイレージの給与を行いながら最終的には１１月１７日まで放牧を行った。本部地区、桶萱地区の放牧地は搾乳牛群や育成牛群に割り付けた。しかし労働力不足及び飼料費の高止まり等を理由に、肥育素牛牛群（雄の育成）、受託牛の放牧は行われなかった。

年間総搾乳量は３０３（３２０）トンで、前年より約５％減となった。搾乳牛率は平均８５．４％であったが、４、５、１２、１月には目安の８５％を下回った。頭数を減らしたこともあって、飼料費は低減されたが、１頭あたりの飼料費は高止まりしている。個体乳量は１６．９kg/日（１７．１kg/日）と一昨年と同程度であった。

（３）放牧受託（公共育成牧場）

放牧受託は、昨年まで、主に東京都から３頭程度を受け入れて行っていた。しかし本年、牧場の労働力不足が顕在化し、受託牛を受け入れて別群として管理することが極めて困難となったため、行われなかった。

２）畜産物の利用・加工技術の開発

（１）乳製品の生産利用・加工技術の開発

神津牧場の特徴は放牧とジャージー牛という高品質でアニマルウェルフェアに配慮した酪農とこれに基づく良質な乳製品の加工・販売までおこなうことにある。このことによって６次産業化による高付加価値を生み出している。

本年度もパック牛乳、ソフトクリーム、バター、チーズ、ヨーグルトといった加工製造について、技術開発と製造を行っている。アイスクリームは、一昨年まで、牧場のレシピにより八ヶ岳中央農業実践大学校に委託していたが、委託先の事情によって、生産中止となった。ナチュラルチーズはその品質を問うべく、２０１４年から国内のチーズコンテストに出品し、１０回の入賞を果たしてきた。本年度の受賞はなかったが、今後とも価値を向上させるべく、コンテストへの応募を行う。この他、日本草地畜産種子協会の放牧チーズフェスティバルに参加し、試食をしながら、消費者意見を聴取したところ、高い評価を得た。

本年度の牛乳生産は９１，７１６本（９１，４０１本；１００％）、バターは缶が２，７２３個（５，５７７個；４９％）、瓶が３３５個（９９５個；３４％）、ソフトミックスは５６，０７４本（５９，２３４本；９５％）、ヨーグルトは大瓶が９，３０５本（８，７９８本；１０６％）、小瓶が８２，７０２本（７５，４４０本；１１３％）であった。缶・瓶ともにバターが大幅に減少した。缶は一昨年から昨年に増加した分、本年に減少したが、瓶では二年続けての減少となった。牛乳は飲用だけでなく、菓子原料としての需要が伸びている。土産物店がお菓子の商品開発に使っているが、神津牧場産というブランドだけではなく、ジャージー牛乳独特の風味と品質が菓子の舌触りや味も評価しているものと思われる。こうした独特な品質の価値を顕在化させるため、バームクーヘンの委託製造を行ってきたが、消費者ニーズに合わせたミニサイズのバームクーヘンは好評を得ている。また、東京の有名ホテルとの牛乳取引、軽井沢の高級ホテルとのバターの取引も順調である。

神津牧場のチーズコンテスト受賞歴

製品名	大会名	部門	賞	主催者
神津さんしょう	JAPAN CHEESE AWARD 2022	非加熱・加熱 圧縮/バラエティ部門	銀賞	日本チーズ協会
神津クリームチーズしょうが	JAPAN CHEESE AWARD 2022	フレッシュ/バラエティ部門	銅賞	日本チーズ協会
神津牧場チェダーチーズ	第13回ALL JAPAN ナチュラルチーズコンテスト(2021)	ハード熟成 6ヶ月以上	優秀賞	中央酪農会議
神津牧場サラミケーゼ	第13回ALL JAPAN ナチュラルチーズコンテスト(2021)	ハード熟成 6ヶ月以上	優秀賞	中央酪農会議
神津トマト&バジル	Japan cheese awards 2020	非加熱・加熱 圧搾/バラエティ部門	No1	チーズプロフェッショナル協会
神津ゴーダ	Japan cheese awards 2020		銅賞	チーズプロフェッショナル協会
神津トマト&バジル	第12回 all Japan ナチュラルチーズコンテスト(2019)		優秀賞	中央酪農会議
神津下仁田ねぎ	Japan cheese awards 2018	非加熱圧搾・アクティブ(風味付加)部門	部門賞	チーズプロフェッショナル協会
神津チェダー	Japan cheese awards 2018	非加熱圧搾・熟成 4ヶ月以上部門		チーズプロフェッショナル協会
神津ゴーダ	Japan cheese awards 2018	非加熱圧搾・熟成 4ヶ月未満部門	銀賞	チーズプロフェッショナル協会
神津サラミケーゼ	Japan cheese awards 2014	非加熱圧搾・アディティブ部門	銀賞	チーズプロフェッショナル協会
神津モッツアレラ	Japan cheese awards 2014	パスタ・フィラータ部門		チーズプロフェッショナル協会

(2) 乳製品の卸販売

生乳は、牛乳として販売する他、バター、ソフトミックス、チーズ、ヨーグルトに加工し、農産物直売所、スーパー、デパート等への卸販売、牧場のロッジとミルクバーにおける直接販売、カタログ等による通信販売で販売している。

本年度の払下形態別の販売額のシェアは、卸 81.6% (78.4%)、ロッジ 12.0% (13.1%)、通信販売 6.4% (8.5%) となっており、卸販売が中心となっている。

また、品目別のシェアをみると、ソフトクリームが 39.5% (39.4%) を占め、次いで牛乳が 32.1% (30.2%)、ヨーグルトの 10.8% (10.3%)、バターの 12.2% (10.8%) とつづき、チーズは 3.4% (4.9%) であった。シェアは牛乳で若干伸び、長期保存庫の再稼働が待たれるチーズで下がった。

（３）肉用肥育・加工

土地利用型の肥育として２シーズン放牧肥育方式を行ってきた。生後２年間粗飼料多給と放牧によって飼養し、その後４ヶ月、穀物肥育する。赤身肉の多い牛肉を生産するこの肥育方式は肥育期間が長期にわたることからコストが増加するため、一般的ではない。しかし、放牧によるメリットはカルニチンやカルノシンといった機能性成分が増加し、さらに、最近では穀物肥育とは異なり $\omega 3$ （オメガスリー）脂肪酸が増加し、 $\omega 6/\omega 3$ の比率が理想的な２に近づくことが明らかとなっている。神津牧場ではこうした特徴を前面に出して、直接消費者に訴求することで差別化し、高額販売につなげることを目指している。

現在、牛肉は、鉄板焼コーナーや食堂での食材としての提供のほか、レトルトのカレー、ハヤシ、シチュー、煮込み、ドイツサラミ、ビーフジャーキー、ソーセージなどの加工品として販売している。これらの商品に対する評価は好ましいものであるが、放牧肥育を付加価値としての販売には至っておらず、販売の仕方やマーケティングの検討が必要である。

本年は上に加えて、牧場において労働力不足が顕在化し、管理する労力の調整が困難なこと、及び、飼料代の高止まりによる肥育コストの上昇により、肥育をいったん中断した。

（４）放牧養豚

豚熱が過去には群馬県、最近でも他県において、養豚場の他に野生イノシシにおいても発生しており、引き続き警戒が続けられている。このため、放牧養豚は引き続き自粛した。

３）実習生・研修生の受入れおよび外部研究機関との共同研究

昨年に引き続き本年も研修希望が多く、１３名の研修を受け入れた。内訳は、大学５名、大学校２名、専門学校５名等であった。うち男性１名、女性１２名と、近年の傾向と同じく女性の研修生が多かった。延べ日数は３０２日（昨年：１２８日）と大幅に増加した。本年はすべての研修を２週間以上の長期としたためである。

共同研究は麻布大学野生動物研究室および農研機構の鳥獣害チームと行っている。麻布大学とは、牧場に生息する野生動物の生態研究の場として提供している。農研機構とは多大な被害を及ぼしているシカについて長期に渡る動態調査を行っている。いずれの連携においても得られた成果を体験プログラムや牧場管理に利用するとともに、得られた成果は専門雑誌への投稿や学生の卒業論文及び修士論文として公表している。また本年はこれまでの蓄積を発展させた研究を、２０２５年度日本競馬会畜産振興事業において開始した。

<公益事業Ⅱ：牧場の持つ多面的機能の発揮促進事業>

（１）牧場体験及び畜産理解醸成

近年、農と食の乖離が広がっているとの指摘がなされている。牧場での家畜との直接のふれあいは食に対する理解を具体的なものとして体験できる貴重な機会である。神津牧場ではこのような機会を提供すべく、牧場主催の「親子体験教室」を開催している。また、幼稚園、小中学校の移動教室や体験教室の積極的に受け入れている。さらに一般来場者にも家畜とのふれあいを体験するプログラムを提供している。

本年も牧場主催の親子牧場体験を７月から１０月にかけて５回行った。参加者は２０家族６０名（１２家族３５名）となった。

学習体験・見学は幼稚園１（昨年１）、小学校５（１１）であった。中野区立の小学校が

移動教室では422名（814名）の体験となった。また、群馬県畜産協会後援による親子牧場体験16名（16名）も7月24～25日に1泊二日で実施できた。

（２）緑資源の高度利用

牧場は農地としての草地、飼料畑だけではなく、林や緑地があり、林縁は特殊な植生を構成し、放牧地は糞虫をはじめとする独特な生態系を作り出している。牧場はこのようなモザイクに複合した生態環境を作り出しており、多様な生物の生活圏を提供し、生物多様性を高めている。このような緑資源を持っている神津牧場では家畜飼養による畜産生産機能と来場者へのふれあい体験機能、牧場景観を楽しむ保健休養機能が顕在化されているが、加えて、環境教育としての役割も担っている。

本年も麻布大学の野生動物学実習が、内山牧場キャンプ場の協力も得て、実施（8月26～29日）された。

（３）情報発信と地域連携

牧場の活動を情報発信することは重要である。取材のあった放送、新聞、雑誌、書籍、は以下の通り。

- 上毛新聞「風っ子」（6月1日掲載）
- 日本農業新聞「半年間ぞろぞろ1万キロ」（8月17日掲載）
- BSフジ「温泉知識マナビ旅」（9月17日放映）
- 観光群馬（群馬県公式観光サイト）「心にググっと観光ぐんま」（7月2日、7月10日、9月5日、12月21日公開）
- テレビ東京「昼めし旅～あなたのご飯見せてください～」『モッツアレラチーズ鍋』（12月17日）
- 読売新聞「ふるさとの逸品」『神津牧場ジャージーバター（群馬県） ミルクの甘い香り濃縮（3月10日他）』
- 旅行ガイド等：るるぶほか数社 この他、地域との連携では多くの行事が開催された。

地域との連携では牧場主催の「神津牧場花祭り」は5月18日に下仁田町観光協会と共催で、町役場、商工会などの協力により開催した。参加人数は1,200名（950名）を超えた。また、秋の「神津荒船もみじ祭」（10月19日）は好天に恵まれ、前年と同様の約600名の参加人数であった。

例年秋から冬に行われている地域のイベント、下仁田町商業祭、下仁田ねぎ祭りに参加した。1月には日本草地畜産種子協会主催の「放牧畜産フェスティバル」にも参加した。

<収益事業>

公益事業を支援する収益事業の柱はロッジでの売店や食堂、宿泊等の提供と「道の駅しもにた」の直営店「神津牧場ミルクバー」での販売である。と同時に、これらの直営事業は消費者と直接対峙することによる消費の反応や評価を見る上で非常に重要な事業となっており、6次産業化モデルを考える上での情報をもたらししている。本年度も消費の回復が進んだことを示していると思われる。冬に行われたデパートの催事（スズラン本店：第21回 大群馬展2026（1/7-13）、高崎高島屋店：第47回ふるさとの味と技の競演 ぐんま展（1/14-19）でも前年と同様、もしくはそれを上回る売上を示した。